

## 詩篇119篇105～112節

- 105 **あなたのみことば**は、私の足のともしび、私の道の光です。
- 106 私は誓い、そして果たしてきました。**あなたの義のさばき**を守ることを。
- 107 私はひどく悩んでいます。主よ。**みことば**のとおり私を生かしてください。
- 108 どうか、私の口の進んでささげるささげ物を受け入れてください。主よ。**あなたのさばき**を私に教えてください。
- 109 私は、いつもいのちがけでいなければなりません。しかし私は、**あなたのみおしえ**を忘れません。
- 110 悪者は私に対してわなを設けました。しかし私は、**あなたの戒め**から迷い出ませんでした。
- 111 私は、**あなたのさとし**を永遠のゆずりとして受け継ぎました。これこそ、私の心の喜びです。
- 112 私は、**あなたのおきて**を行うことに、心を傾けます。いつまでも、終わりまでも。

נֶר־לְרִגְלִי דְבָרְךָ וְאוֹר לְנִתְיָבְתִּי  
 נִשְׁבַּעְתִּי וְאַקְיִמָּה לְשֹׁמֵר מִשְׁפָּטֶי צְדָקָה  
 נַעֲנִיתִי עַד־מָאֵד יְהוָה חֲנִינִי כְדָבָרְךָ  
 נִדְבֹוֹת פִּי רָצָה־נָא יְהוָה וּמִשְׁפָּטֶיךָ לְמַדְנִי  
 נַפְשִׁי בְּכַפִּי תָמִיד וְתוֹרָתְךָ לֹא שָׁכַחְתִּי  
 נָתַנּוּ רְשָׁעִים פֶּחַ לִי וּמִפְקוּדֶיךָ לֹא תָעִיתִי  
 נִחַלְתִּי עֲדוֹתֶיךָ לְעוֹלָם כִּי־שִׁשׁוֹן לְבִי הָמָּה  
 נָטִיתִי לְבִי לְעֲשׂוֹת חֻקֶּיךָ לְעוֹלָם עֲקָב

第十四字「ヌーン」は「N」に相当する子音で、八つの節すべてで異なる単語が使われています。

- נֶר (נִיר) / ネール (ニール) …ランプ、灯火 (105)
- נִשְׁבַּעְתִּי (נִשְׁבַּע) / ニシュバーティー (シャーヴァー) …誓う、誓約する (106)
- נַעֲנִיתִי (נָעַן) / ナアネーティー (アーナー) …悩む、苦しむ (107)
- נִדְבֹוֹת (נִדְבָה) / ニドゥボート (ネダーヴァー) …奉仕、自発性 (108)
- נַפְשִׁי (נֶפֶשׁ) / ナフシー (ネフェシュ) …魂、自己、命、欲求、精神、生物、願望、感情、情熱 (109)
- נָתַנּוּ (נָתַן) / ナートゥヌー (ナータン) …与える、授ける、譲る、許可する (110)
- נִחַלְתִּי (נָחַל) / ナーハルティー (ナーハル) …所有として取る、相続する (111)
- נָטִיתִי (נָטָה) / ナーティーティー (ナーター) …広げる、拡張する (112)

**あなたのみことばは、私の足のともしび、私の道の光です。** (105 節)

この聖句はあまりに有名で、多くの人に暗誦されているでしょう。改めてじっくりとこの節を味わってみますと、神のことばが闇夜を照らすランプのように詩人の人生の歩みを導いている、そんなイメージが浮かんでまいります。「一寸先は闇」とも言われるように、私たちの人生は明日にも何が起こる

か分かりません。天地がひっくり返ってしまうような事件は、いつも青天の霹靂のごとくやってきます。歴史的な事件が勃発するとき、実はその前兆となる出来事が起きているものですが、ほとんどの人には何が起きたのか分からないほど突然ニュースで知らされます。触れそうなほどの闇が支配する世を手探りで進んで行く私たちであります。そこに与えられた灯火がありました。それが「神のことば」です。この光の照らす所を通って行けば、道に迷うことなく、崖から転落することもなく、人生の旅路を全うすることができるでしょう。

今日の箇所でも「神のことば」は様々に言い換えられていますが、「さばき(ミシュパート)」

(106, 108) という語が繰り返し使用されています。神の裁きの基準である御言葉を守り、そこから熱心に教えを受けようとする詩人がいます。人間世界の「裁き」が如何に偽りに満ちたものであるかを知っていたからでしょう。詩人にとって最終的に頼れるところは、神のことばを置いて他になかったのです。私たちが生きる現実も、裁判の多くがカネの力によって歪められていることを知ると、何ともやるせない気持ちになります。だからこそ、神の義が貫徹されることを願うのです。

「私はひどく悩んでいます」(107 節)。詩人の苦悩を感じ取りたい。「悪者は私に対してわなを設けました」(110 節) と言われているように、詩人をおびき寄せて道に迷わせようとする者がいました。時には甘言によって、時には攻撃的な言葉によって、光の内を歩もうとする詩人を偽りの道へと誘おうとしたのです。人は弱い部分を突かれて誘惑に遭うとき、または誹謗中傷を受けて怒りに燃えるとき、道を踏み外しやすいものです。そういうとき、罪を犯さないように気をつけなくてはなりません。すぐに言葉を発するのではなく、熟慮をもって自分の行動が誰かを傷つけたりつまづきを与えたりしないかどうかを判断する必要があります。

「私の口の進んでささげるささげ物」(108 節) とは「賛美」を意味するでしょう。自分の口から出てくる言葉が誰かを呪うものではなく、どこまでも賛美に満ちたものであることを切望しているのです。また、「あなたのさとしを永遠のゆずりとして受け継ぎました」(111 節) とは、神のことばを受け取ることが、まるで土地を取得するかのように、一生動くことのない心の財産になることを象徴しているようです。

**私は、あなたのおきてを行うことに、心を傾けます。(112 節)**

心を傾ける。詩人の人生のベクトルは常に「御言葉を行なうこと」に向いていました。神の導きの御手の中にあるとき、私たちが第一に心に向けるべきものは「神のことば」です。しかも、それを聞いて終わりではなく、全身全霊で心を傾ける、すなわち実行することこそが重要なのです。光によって照らされた道を歩いて行くとき、様々な障害物と直面することになるでしょう。しかし、どんな問題であっても神のことばに依り頼むならば解決することができます。光は闇をも光へと造り変えてしまうからです。

**すべての人を照らすそのまことの光が世に来ようとしていた。(ヨハネ1:9)**

キリスト者にとって、その「光」とは私たちの主イエス・キリストを指します。この方の足跡を踏み行けば、道に迷うことはありません。